



校長つうしん No.19



2017.5.9
鈴木 恵一

連休中に気温が上がったおかげで桜が開花し、ようやく春が来た感じですね。これから百花繚乱の季節。大通高校のミツバチたちも蜜集めで学校周辺を飛び回っています。生徒の自転車通学の姿も増えてきました。どうか安全運転を！ゴールデンウィークはあっという間に終わってしまいましたが、もとのペースに戻すのに苦労していませんか？ 今月は3年次の見学旅行があります。集団行動は、綿密な計画が大切です。実りある学びの機会となるようしっかりと事前準備に取り組んでください。

科学の目をもつこと

以前、この通信で「右脳・左脳」について触れたことがあります。私の認識不足であったことをお詫びします。世に知れ渡っている「右脳・左脳の役割」については、かなり怪しい情報だということが脳科学研究の分野で強調されています。



よく、「右脳を鍛えよう！」などと様々な脳刺激、脳開発を促進することを謳った商品がPRされていますが、医学では脳の機能について明確に証明されていることは意外と少ないというのが現状です。

最新の検査技術を駆使して、芸術などを対象とした脳機能の実験をおこなっても、「右半球にも活動のピークがある」といった程度であり、多くの実験では左半球にも活動の増大が認められるそうです。いつどこで「右脳・左脳ブーム」が起こったかわかりませんが、脳のどの部位がどの認識機能を担うかについてはおおまかに分類されるだけで、個人差もあるそうです。

「ひらめきやフィーリングを重視するクリエイティブな芸術家などは右脳人間」「事実や秩序を重んじる論理的・科学的な思考の人は左脳人間」などというのも俗説でしかないというレベルの話です。じゃあ、どっちでもない鈴木はナニ人間？……と、分類に悩む必要もないわけです。

Why! Japanese People!

科学や医学の分野は常に進化し、多くのことが明らかにされているのは事実です。

しかし、私たちの日常には「似非科学」「疑似科学」と呼ばれるものも広く浸透しています。その代表格としてよく指摘されるのが「血液型性格分類（血液型相性診断）」でしょう。

これは、商売と結びついていて、特に著作物の売り上げ増につながり、ブームから50年以上経過した今も受け継がれている筋金入りの似非科学かもしれません。海外の医学界では、「日本の医学はノーベル賞を受賞したり、国際的に先端の理論や技術を数多く開拓しているのに、血液型に関することだけはまるで原始社会だ」と酷評することがあります。

恐ろしいことに、企業の採用や昇進などの人事考課に血液型が用いられたり、スポーツ選手の起用に血液型を参考にする監督がいるという例が未だにあるそうです。最近ではブラッドタイプ・ハラスメント（血液型によって人の性格を判断し、相手を不快や不安な状態にさせる言動、嫌がらせ）として問題視されています。今もなお、ある年齢以上の世代には血液型性格分類“信者”がいるということかもしれません。ネットで調べるとますます混乱します。血液型性格分類を批判しておきながら、なぜここまで日本だけに浸透しているのかの理由を「日本人にはA型が多いからだ」という、わけのわからない論拠に出会う始末です。科学で説明がつかないことやスピリチュアル(spiritual)な話を、靈魂と結びつけるか、精神や心の持ちようとして考えるかで、まったく違ってきます。



人が生きていくうえで大切な規範や指標を与えてくれる理論は歓迎すべきですが、そこには正しい判断ができるだけの知識を持つことが前提となります。そういう意味では小中高校時代に学ぶ科学（物理、化学、生物、地学）は基礎中の基礎であり、物事を科学的・論理的にとらえるために大切にしなければならない内容がたくさん詰まっています。

科学に限らずどんな分野にも求められることは、自ら「問いを立てること」、そして可能な限り自ら「調べること」です。友達と分担して調べ、情報交換するのもいいでしょう。

小さい頃を思い出してください。

「ねえ、どうして？ どうして？ なぜ？ おしえて！」

「聞いてばかりじゃなく、自分で調べてごらん」

そうやって私たちは成長してきたのです。もっといえば、そうして人類は偉大な進化を遂げてきたのです。今は、ネットに掲載されている情報の真偽を判断する力も求められる時代です。自分が得た情報に対しても「これってホント？」と……面倒だけど地道に学んでいきましょう！

